

論 説



翻訳における「知識の普遍化」の変遷†

宮 沢 厚 雄†† 石 川 徹 也††

1. はじめに

一般に「翻訳」とは、ある言語 L_1 による単語や文章を、もう一つの言語 L_2 による単語や文章に変換する作業を言う。この場合、言語 L_1 と言語 L_2 の、両方向の相互対話を可能とするために、両言語にまたがった言語理解の能力が必要とされる。現在、研究開発が進められている機械翻訳システムでは、この複数の言語理解の能力をもった媒介項を「中間言語」 L^* と呼称し、その機能化が計られている*。

中間言語の機能化には、統語情報の一般化の範囲に止どまらず、多言語理解の上で必要となる包摂度の高い思考概念の枠組みが提供されなければならない。その実現のために「普遍言語」と呼ばれる「人工的な自然言語」の待望論から、今日の「人工言語」そのものの研究へと変遷してきた。本論では近年の科学哲学や言語哲学の成果を中心に検討し、機械翻訳システムがもつべき「中間言語」 L^* の機能について考察を行う。

以下、2. において普遍言語の歴史的概観を試み、3. において人工言語の提唱をウィーン学団の主張にみ、4. において中間言語を介する翻訳の不可能性を論じ、5. においてコミュニケーションの本質を問うて翻訳の可能性を論じ、6. で本論の結論として知識の普遍化概念の必要性を論じる。

2. 「普遍言語」思潮のはじまり

17世紀はヨーロッパにおいて「普遍言語」が待望された時代であった。かつてのヨーロッパの統一言語であったラテン語はナショナリズムの勃興

を前に勢いを失し、代わって各国語が錯綜し始めた。民族間に打ち続く戦乱の原因を、言語の分散すなわち「バベルの塔」の神話に帰する人々は、普遍言語という「人工的な自然言語」によって形づくられる「言語のユートピア」の夢にとりつかれた。

一例をあげるなら、ウィルキンズ(John Wilkins: 1614-1672)である。1660年に組織された、近代科学に関する学術団体である「ロンドン王立協会」(Royal Society)の創設会員のひとりであったウィルキンズは、日常言語である英語の純正化運動を目指し、ロンドン王立協会の綱領にも数学をモデルとした記号言語の必要性をうたった。ウィルキンズは「真正符号と哲学的言語についての試論」(Essays towards a Real Character and a Philosophical Language: 1668)の中で、言葉が即時に事物そのものに繋がるような表記法を提案した。それは、あらゆる概念を分類し、その分類概念のひとつひとつに記号を当てて、それらの組合せで言葉を生成しようという普遍化概念の一覧表であった*。

ウィルキンズに続き、世界を一個の究極なる言語システムに還元してしまいたいという気の遠くなるような欲求を抱く人々が、以降、数多く輩出した。こうした熱情は、ペアノ(Giuseppe Peano: 1858-1932)の科学者のための国際的公用語「インテルリングア」(Interlingua)、ザメンホフ(Ludwig Lazarus Zamenhof: 1859-1917)の「エスペラント語」(Esperanto)といった普遍言語の創造にみるこ

* ウィルキンズの「表記法」についてはボルヘス著『異端査問』の中の一編「ジョン・ウィルキンズの分析言語」にみることができる(下記引用参照)。

「ウィルキンズは宇宙を40のカテゴリないし《類》に分けるが、《類》は《差》に、《差》はさらに《種》に分かたれる。おのおのの《類》には、二文字の単音節語が当てられ、おのおのの《差》には子音、おのおのの《種》には母音があてられる。こうして、例えば de は四大〔空気、水、火、土〕(筆者追記)を、deb は四大の最初である火を、deba は火の一部をなす炎を意味する」(Borges, Jorge Luis: Otras Inquisiciones, 1937-1952, Emece (1960) 中村健二訳: 異端査問, 東京, 晶文社 (1982), 邦訳 155頁)。

† The Historical View for the Universal Knowledge on the Translation by Atsuo MIYASAWA and Tetsuya ISHIKAWA (University of Library and Information Science).

†† 図書館情報大学図書館情報学研究科修士課程

††† 図書館情報大学図書館情報学部

* 言語 L_1 から言語 L_2 へ直接に向かう翻訳を「一般的翻訳」とするならば、言語 L_1 から「中間言語」 L^* を介して、言語 L_2 へと向かう翻訳を「分析的翻訳」とここでは名付ける。

とができる。

そして他方では、ジョン・レイ (John Ray: 1627-1705)、リンネ (Carl von Linné: 1707-1778) らの植物学から、ディドロ (Denis Diderot: 1713-1784) やダランベール (Jean Le Rond d'Alembert: 1717-1783) らの「百科全書派」(Encyclopedistes) へと至る近代分類学の方法論を産出した。

普遍言語運動はさらに形を変えて、ライプニッツ (Gottfried Wilhelm Leibniz: 1646-1716) の形而上学的方法論を経て記号論理学へと発展し、チョムスキー (Avram Noam Chomsky: 1928-) の提唱する形式文法へと変遷してきたといえる。すなわち「人工的な自然言語」の創造から、より厳密に形式化された「人工言語」そのものの学術研究に発展し、その成果の利用としての応用技術へと進展したとみることができる。こうした試行の先駆として、今世紀初頭に組織された「ウィーン学団」の主張がある。

3. 分析的翻訳の形式化の試み

「ウィーン学団」(der Wiener Kreis) は、20世紀初頭、ウィーン大学で結成された哲学思潮のグループである。「哲学の科学化」を目的に「あらゆる哲学を終焉させる哲学」を僭称した¹⁾。

「ウィーン学団」の考え方は、一般に「論理実証主義」(Logischer Positivismus) と称されている。そもそも「実証主義」とは、コント (August Comte: 1798-1857) やミル (John Stuart Mill: 1806-1873) などにその考え方がさかのぼる。事実に基づいて論証を推し進めようという主張だが、その背景には、古代・中世の神学的思考から脱し、神が決めるのではなく人間が決めるのだという、近代人の強い決意のほどがみられる。そしてこの立場に「論理」という言葉を冠した理由について、命名者の一人であるファイグル (Herbert Feigl: 1902-) は「われわれの立場と、コントやミルのような経験主義の立場との間の重大な相違点を明らかにするためにぜひ必要なものであるように思われた」と述べ²⁾、その詳細を以下のように説明する。

ファイグルによれば正当な知識には二つの種類しかない。一つはア・プリオリ (a priori, 先験的) で純粋に形式的・分析的な知識、つまり「論理学と数学の命題からなる知識」である。もう一つは経験に依存する事実的な知識、つまり「自然科学

の命題からなる知識」である。

論理学・数学の命題は、「タウトロギ」(Tautologie, 恒真, 同語反復式) であり、それ自体に内容はなく、言い換えれば「規約」(Konvention) によってあらかじめ真なるものである。この命題は形式化された記号体系によって表現される。具体的には、①それ自体意味をもたない記号、②初期のいくつかの記号配列 (公理)、③公理の変形過程を統べる推論規則、から組み立てられるいわゆる「人工言語」である。

一方、自然科学の命題は、日常言語によって表現される。曖昧な日常言語と人工言語との間に対応を実現させ、自然科学の命題を論理学・数学の命題で再構成することを「分析化」と呼ぶならば、自然科学の命題は論理的な分析化によって「有意味」(sinnvoll) であることが証示されなければならない。言い換えるならば論理学・数学の命題によって論証され得るという「検証可能性」(Verifizierbarkeit) をもつ命題だけが、自然科学においては真偽を問い得る有意味な命題となる。

ここでいう論理学・数学の命題つまり人工言語こそが、現在の機械翻訳システムにおいてとらえられている中間言語 L* の役目を担うものである。すなわちウィーン学団の考え方は、自然科学の命題を論理学・数学の命題によって厳密に形式化しようとした「分析的翻訳」の試みだと言い換えられる。

こうした考え方を学団の有力メンバのひとりであったカルナップ (Rudolf Carnap: 1891-1970) によってもう少し仔細にみることができる。

カルナップは、その講義録「科学の普遍言語としての物理言語」(Die physikalische Sprache als Universalsprache der Wissenschaft: 1932) の中で、「内容的話法」(inhaltliche Redeweise) から「形式的話法」(formale Redeweise) へという、いわば形式主義への変換を主張した³⁾。カルナップの師フレーゲ (Friedrich Ludwig Gottlob Frege: 1848-1925) は、「数学は論理学の分枝にちがいない」という言葉を残した。つまり論理学と数学が明らかにした唯一の命題の在り方は、共にタウトロギとして存在することなのである。論理学と数学の両者によって、自然科学の命題にも少しずつ論理的な分析化を加えていけば、いずれいくつかのそれほど多くはない共通概念 (公理) が析出してく

るはずである。

こうした共通概念はカルナップの言葉では「プロトコル言明」(Protokollsätze) と呼ばれ、講義録の表題にあるとおり「物理学の言葉」で表現され、自然科学の普遍言語として存在するはずのものであった。このプロトコル言明が得られれば、それらの組合せと変形によって自然科学の命題は自在に表現できる。そこには燦然たる「統一科学」(Einheitswissenschaft) が樹立され、思想の乱立が回避されるに違いない。これが、カルナップを始めウィーン学団のだれしもが考えた薔薇色の構想だったのである。プロトコル言明を中間言語 L^* と解釈すれば、統一科学とはまさしく翻訳における普遍言語構想の一形態である。

4. 「翻訳」の不可能性の主張

自然科学の命題を論理学・数学の命題によって厳密に形式化しようとした試みであるウィーン学団の普遍言語構想は、しかしながら多くの問題を抱え込むことになった。その問題指摘は、第一に「検証可能性」(verifiability) をめぐって加えられ、第二には「規約主義」(conventionalism) が俎上に乗った。

前者の批判は、言語 L と中間言語 L^* の間の断絶を指摘して翻訳の「不可能性」の主張へと発展し、後者の批判は、中間言語 L^* は複数存在してしまうことを指摘して翻訳の「多様性」の主張へと展開した。以下、翻訳不能論について、不可能性と多様性の両面からの議論を概説し、併せて機械翻訳システムがもつべき機能について現在の時点から考察を行う。

4.1 不可能性の主張

ポパー (Karl Raimund Popper: 1902-) は『科学の発見の論理』(Logik der Forschung: 1934) の中で「科学」と「非科学」を区別するのは「検証可能性」ではなく「反証可能性」(falsifiability) であると以下の例をもって主張した⁴⁾。

たとえば「すべてのカラスは黒い」という主張を検証するのに、カラスを何千羽何万羽と観察しても不十分であるが、しかしもし一羽でも「白いカラス」が観察されれば「すべてのカラスは黒い」と主張することはもはやできなくなる。この場合「白いカラス」の存在を立証することが「すべてのカラスは黒い」という主張に対する「反

証」となる。

ポパーは「すべてのカラスは黒い」といった、自然科学の法則のような「全称言明」を検証することは不可能だが、ただ一つの否定的事例を立証することは可能であると考えた。そこで、いまだ実際には反証されていない理論こそが科学的な理論であると主張した。

当主張は、機械翻訳システムの「辞書」機能に対する批判とみることができる。すなわちアルゴリズムとしての「翻訳」機能が可能になっても、「辞書」構築を完全にできなければシステムとしては不完全であろう。しかしながら「辞書」の完全性を検証することは不可能であり、可能なのはその「辞書」に載っていない言葉を見出すことなのである。つまり「辞書」機能には反証可能性が残されているだけなのである。当批判に対し、機械翻訳システムを成り立たせるためには、最近の研究成果にみられる未知語推定処理の機能研究が重要になる。

次いでクーン (Thomas Samuel Kuhn: 1922-) はポパーの議論を踏まえ『科学革命の構造』(The Structure of Scientific Revolutions: 1962) の中で「パラダイム」(Paradigms) と「科学者共同体」(scientific community) という概念を唱えた⁵⁾。

パラダイムとは、科学研究に携わる者が共有し容認しあっている「ものの見方・問題の立て方・研究手続き」などを含めた研究上の「規範」の総称である。一方、科学者共同体とは、あるパラダイムを共有することによって初めて成り立つ専門家たちの「共同謀議の場」であり、ここで成立する科学をクーンは「通常科学」(normal science) と称した。

ところがパラダイムが制度化されある程度固定化されてくると、そのパラダイムに収まりきれない変則事象が出現する。その出現が頻繁になって臨界点に達すると既成のパラダイムに対して一種の革命的状況が発生する。クーンは、これを「科学革命」(science revolution) と呼んだが、この科学者の「革新」がまた新たなパラダイムを生み出していくのである。

ここで問題なのは、クーンの立場に立てば真理とはパラダイムに相対的なものだということになる。このことは後にファイヤーアーベント (Paul Karl Feyerabend: 1924-) によって強く主張され

る「共約不可能性」(incommensurability)の問題と結びつく。つまり異なったパラダイムの間では同一の術語の意味内容が完全には同一に解されないということになる。たとえば、ニュートン力学における「質量」という言葉の概念と、アインシュタインの相対論における「質量」という言葉の概念はまったく異なることになり、それらは同一の平面上で比較することはできなくなる。

ファイヤーアーベントは共約不可能性の概念をさらに押し進め、その著『方法への挑戦』(Against Method; Outline of an Anarchistic Theory of Knowledge: 1975)の中で徹底した多元主義を唱えた⁹⁾。ファイヤーアーベントにとって科学とは著作の副題にもあるとおり本質的には「無政府主義的」な営みであるとする。つまり科学の「進歩を妨げない唯一の原理は anything goes (なんでもかまわない)」のであり¹⁰⁾、その主張は普遍言語構想といった考え方からは大きく隔たったものとなっている。言い換えれば、パラダイム相互に翻訳はもはや成り立たず、言語Lと中間言語L*の間の断絶が指摘されて、われわれはここに翻訳は不可能だという強い主張をみる。

当主張は、機械翻訳システムにおける対訳語の設定・維持・管理および訳語選択のアルゴリズムに加えられた批判とみることができる。言い換えれば立場の異なる利用者全てに満足を与える訳語の設定、意味の進展にともなう訳語管理、利用者の立場に立った最適な訳語選択の機能化などが求められるのだ。このことに対し現時点での機械翻訳システムでは、利用者の運用に任せるという立場を取っているにすぎず、不可能性への明確な回答は与えられていない。

4.2 多様性の主張

ウィーン学団の考え方に加えられた問題指摘の第二は、「規約主義」(conventionalism)への批判であった。すなわち先験的に真であるということはあるのかという公理の存在自体への疑義である。

ハンソン(Norwood Russell Hanson: 1924-1967)は、『科学的発見のパターン』(Patterns of Discovery: 1958)の中で「理論荷性」(theory-ladenness)という概念を唱えた¹¹⁾。それはデータ(data, 所与事実)というものは字義どおり純粋に「与えられるもの」ではなく、むしろ科学者がそれぞれ

の理論的関心事に導かれて苦労して見つけ出す「価値ある事実」にはかならないという考え方である。同一の事実が異なって解釈されるのではなく、理論的関心のありかたによって見られる事実そのものが初めから違うというのがハンソンの主張である。

クワイン(Willard van Orman Quine: 1908-)もハンソンと同様に規約主義に反論し、「意味」とは一つの「まやかし」に過ぎないと主張した。つまり単語や文章にはそれぞれ一定の意味があり、その意味ゆえに言語は機能するのだという極めて自然な見方をクワインは否定する。

クワインは『ことばと対象』(Word and Object: 1960)の中で、ふたつの言語の間には自由な解釈の余地が多すぎるので唯一最良の翻訳システムを確定することはできないと主張する¹²⁾。このことをクワインは「翻訳の不確定性」(indeterminacy of translation)と呼び「ある言語を別の言語に翻訳するための手引きには、種々の異なる手引きが可能であり、いずれの手引きも言語性向全体とは両立しうるものの、それら手引きどうしは互いに両立しえないということがありうる」と定義する¹³⁾。つまり翻訳のマニュアル(たとえば辞書や文法書)を作る場合、相互に対立する複数のマニュアルができてしまい、いずれが正しいのかという問いかけ自体も無意味だとした。

クワインの場合、翻訳の概念を言語的な「同義」とか「等置」という概念に訴えることなく、その基準として「対話の一般的な円滑さ」(general fluency of dialogue)を提案しているが、そういう行動主義的なところまで翻訳の概念を広げても翻訳結果は一意には定まらないとする。人間の言語行動というデータ全体と適合しながらも、なお互いに重要な点で相違する複数の理解が存在してしまうからである。

換言すれば、ある言語L₁を別な言語L₂に翻訳する場合に複数・多様な中間言語L*が存在し、結果として対象言語L₂が一義には定まらないことになると解せる。翻訳の「多様性」を主張し、その不能を言明したものである。

さらにクワインは異文化の間の言語の「不確定性」に止どまらず、自国語内における同様の事情にも言及する。「それは【異文言語の根底的翻訳】(筆者追記)から引き出されねばならない主な教

訓は、われわれ自身の信念が経験としっかり結びついていないということに関係している。というのは、われわれ自身が有している見解は、実際にはありそうもない(想像上の)冗談に登場する同国人に帰せられるような見解へと改められることも可能であろうからである¹¹⁾。クワインの言葉で「根底的翻訳」(radical translation)とは、まったく未知の言語を初めて自国語に翻訳しようとする場面をいうが、そこから得られる教訓として、一つの言語からその言語自身への、いわば同一言語下における「ひねった翻訳」が可能だという指摘がなされている。すなわち、今われわれが抱いている信念がすべての証拠と適合しているとしても、経験から得られる翻訳基準の選択を多少でもずらせば、それは「非実際的な冗談」いわば狂人の見解と同じになるという。「われわれをコミュニケーションの中で互いに結びつけている一様性の背後には、混沌とした私的で多様な結合関係が存在するのであり、その結合関係は、各人に応じてそれぞれ進化し続けている。われわれのどの二人も言語を同じようには学ぶことはないし、生きている間はある意味では言語を学び終えることもないのである」と主張する¹²⁾。

以上の主張は、情報の圧縮や伝達に係わる処理に加えられた批判とみることができ。抄録を作成したり、抄録を見て当該論文に当たるか否かを判断したり、情報検索において情報要求者の要求内容を検索式に置換したり、そうした一連の作業も「翻訳」の一種であろう。このような情報理解は、一文対応の処理ではなく、情報利用者の文脈理解によって多様に変化せざるをえない。こうした文脈解析は、統語情報を中心に機能する現在の機械翻訳システムでは十分に対応しきれていない。文脈理解は翻訳システムの外に位置付けられる機能かもしれないが、少なくとも情報利用者の置かれた状況を的確に判断するための機能化といった研究が必要となる。

こうして不可能性と多様性の両面から翻訳は不毛の地に追い込まれた。しかしながら、果たして翻訳は本当に不可能なのだろうか。われわれは別な観点から翻訳についての可能性を再度検討してみたい。

5. 「翻訳」の可能性の主張

翻訳の可能性が少なすぎるというファイヤーアーベントらの主張、そして多すぎるというクワインらの主張に対し、翻訳は一意に定まると主張するのがデイヴィッドソン (Donald Davidson: 1917-) である。デイヴィッドソンは、タルスキ (Alfred Tarski: 1902-1983) の真理論を踏まえながら、その著『真理と解釈』(Inquiries into Truth and Interpretation: 1984) の中で、その論議を展開する¹³⁾。

タルスキは論文「真理の意味論的観点と意味論の基礎」(The Semantic Conception of Truth and the Foundations of Semantics: 1944) の中で、日常言語の中で真理なるものを定義する試みを断念し、形式化された言語の中で相対的に定義を与えようと考えたのである¹⁴⁾。すなわち、言語 L_1 による文 s の真理を定義するのに、メタ言語 L'_2 の中の同義な文 p への翻訳を前提にして定義しようと試みた。この場合メタ言語 L'_2 は、たとえば次のように表現される。

[文 “Snow is white” が真であるのは、雪は白いとき、またそのときに限る]

一般にメタ言語 L'_2 は [文 s が真であるのは、 p ときまたそのときに限る]^{*} と定式化されるが、タルスキはこのような同値文を「Tの形の同値文」(以下「T文」と略記) と称した。そして、真理の理論には、①言語 L_1 の中のいかなる文 s についても、それに対応するメタ言語 L'_2 のT文を導出できること、②そのような証明可能なT文のすべてが実際に真であること、の二つの条件が必要であるとした。

このように、タルスキは言語 L_1 の文 s とメタ言語 L'_2 の中の文 p との同義性を前提とすることによって、T文そのものの真理性を保証できるとした。つまり日常言語と形式言語の同義性を前提とすることによって、日常言語の意味理解を形式言語の意味理解の中に預けたのである。

これに対し、デイヴィッドソンは真理概念自体を、われわれに既知のもののみとしたのである。そしてタルスキの真理の定義を基に、メタ言語そ

* T文訳出において、通常「 p のとき」と表記するのを「 p とき」としたり、「雪が白い」ではなく「雪は白い」と訳出したりした理由については、参考文献14)の邦訳書に説明がなされている。

のものの中に、日常言語の文の意味を与えることのできる能力があると解釈し直したのである。

デイヴィッドソンの主張をわれわれの文脈で解釈すれば、メタ言語のT文とはすなわち中間言語L*に相当する。このとき中間言語L*は原始的で、無条件に存在するというのがデイヴィッドソンの主張なのである。

つまり人間が何かを真なるものと信じ、これを言葉に乗せる所作がT文〔文sが真であるのは、pときまたそのときに限る〕の形で成り立っているとす。そのとき、この最低限の前提に基づいて、内実としては多彩な考え方をもっている相手に対して一定の理にかなった翻訳を行うことが可能になると考えたのである。

ここでデイヴィッドソンが拠り所としているのは、いわゆる「善意の原則」(principle of charity)である。つまり異なる言語を使っていたとしても、その言語の話し手の心の中の「信念」* そのものは本性上だいたいにおいて真なのだという原則論である。したがって言語L_iのネイティブ・スピーカの発話と周囲の状況との合致を最大化するような解釈を選ぶこと、またそのネイティブ・スピーカの言っていることが理解できない場合でも相手に不整合があると考えよりも、相手の自己整合性を最大化するように務めること、そうしたことが翻訳において必要だと説く。このように、解釈者が実際の場面で発話を理解しようとして用いる解釈の方法を「経過理論」(passing theory)とデイヴィッドソンは呼んだ。

かつて「論理実証主義」を標榜するウィーン学団は形而上学的命題を「ナンセンス」(unsinnig)なものとして排除した。こうして彼らは、たとえば信念なるものを議論の埒外に置き去りにしたのである。しかしながらデイヴィッドソンの主張は中間言語そのものに信念という人間固有の認知能力をあてはめたものだとして解釈することができる。日常言語を理解することは、われわれが共通にもっている中間言語L*への翻訳によってあらかじめ無条件に成り立っているのだ。そして実は、この中間言語的信念こそが「知識の普遍化」機能そのものを担うことになるのである。

6. おわりに

人間が言語を用いてコミュニケーションをはかる以上、翻訳作業は必須の前提となる。そしてその効率化を目指すならば機械翻訳システムは必要不可欠なものとなろう。17世紀ヨーロッパにおける普遍言語待望論にさかのぼり、その後の翻訳に係わる議論を科学哲学や言語哲学の成果を取り込みながら概観してきた。この結果、中間言語がもつべき機能として知識の普遍化機能の必要性が明確に浮かび上がってきた。このことは機械翻訳システムの開発研究を通じ何度も呼び通されてきたことであり、今さら新奇なる事項ではない。事実、すでに述べたようにEDRおよびCYCプロジェクトなどは本件を目的に推進されているものといえるだろう。だが、ここでもう一度、本論の論旨に添って以下のことを確認しておきたい。

すなわち、この知識の普遍化機能を考慮に入れるなら、おそらくデイヴィッドソンの主張は翻訳の本質をコミュニケーションの中に求めているものと理解できる。コミュニケーションとは、異なる人間同士が異なる言語を用いながら互いの共存性を確認し合う作業であると定義できる。このことから翻訳作業はデイヴィッドソンの言葉で言うところの「合意」(agreement)を不断に生み出す過程と理解できる。

そこで翻訳は中間言語L*の「存在」によって成り立つものではなく、むしろ中間言語L*のもつべき「機能」すなわち知識の普遍化機能によってこそ成立するものと理解できる。換言すれば、翻訳は固定化されるものではなく、普遍化されていく機能によって、絶え間なくそして繰り返し成り立ち続けるものなのである。

現在の機械翻訳システムでとらえられている中間言語は、統語情報を中心とするものであり、タルスキの言うT文に相当するものは「辞書」機能の中に求められている。すでにEDRおよびCYCプロジェクトにみられるように、T文を保証するための辞書機能の構築が推進されている。そこで今後は、統語情報と辞書機能を一体化させた中間言語の機能化が「知識の普遍化」レベルにまで高められること、そしてそれが継続して維持されることが期待される。

ところでデイヴィッドソンは「善意の原則」に

* 信念とは、心の状態、あるいはそうした心の状態が向けられているなんらかの対象、とここでは定義する。

よってわれわれの言葉に翻訳できないものは「言語」とは考えられないと大胆に主張している。そしてまったく同様の主張をレヴィ=ストロース (Claude Levi-Strauss: 1908-) がその対話集の中でやっている。いわく「言語に固有な本質とは翻訳可能性であり、翻訳不可能なものは言語ではない」と*。

しかしながらデイヴィッドソンやレヴィ=ストロースの見解は逆立していると言わなければならない。人間は言語を有するがゆえに知識の普遍化機能をもつのではなく、普遍化機能を内在しそれを常に高めているがために言語を使って他者とのコミュニケーションに挑むことができるのである。「私」以外の他者を理解することが翻訳の本質とするならば、そこには人類という種に共通する中間言語的な信念の基盤が前提とされているはずなのである。他者理解においては、言語はむしろ部分的な役割に限定される。そこでは言語以上に当事者の置かれた状況や環境や出自といった、知識の普遍化機能が重要視されなければならない。

たとえば、次の例文を機械翻訳システムにかけてみよう。

人物A: 水を一杯いただけますか。

人物B: (Aにコップの水を渡す)

人物A: どうも。

このとき中間言語の存在だけに依存する機械翻訳システムでは、AはBに対し丁寧にものを頼んでいるのであり、したがってAはBより目下かあるいは同等の地位にあるものと考えられる。しかし、それで全てだろうか。たとえばAが教師でBが学生だったり、Aが客人でBが主人だったり、あるいはAが親でBが子だったら、どうだろうか。そのような場合に先の会話でいったい何が本当に生じているのかを知るためには、その人間の置かれた関係性 (situation) を知らなければならない。つまり言語以上に、言語を成り立たせている知識の普遍化機能について熟知していなければならない。

*『レヴィ=ストロースとの対話』は、1959年にフランス国営テレビが放映した、レヴィ=ストロースへのインタビューをまとめたものである。この中で、文化を表す最も基礎的な「しるし」は何かというインタビューの問いに対し、レヴィ=ストロースは、文化と自然との間の境界線を引くならば、それは言語であると答え、続いて引用の言葉が述べられる。

Charbonnier, Georges: Entretiens avec Claude Levi-Strauss, Librairie Plon, et Ed. Julliard (1961). 多田智満子訳: レヴィ=ストロースとの対話, 東京, みすず書房 (1971), 邦訳 171頁。

こうして翻訳は、狭い意味の、異言語間の変換機能として止どまることなく、より広義に、人間同士のコミュニケーションにおける内容理解機能として再解釈する必要がある。このとき、翻訳に必要な知識の普遍化機能についての議論は、我が国においてまだまだ明確にされていないと考え、今後の活発な議論が待たれる。

参 考 文 献

- 1) Kraft, V.: Der Wiener Kreis, zweite erweiterte und verbesserte Auf., Wien, Springer, (1968, erste Auf. 1950). 寺中平治訳: ウィーン学団, 東京, 勁草書房 (1990).
- 2) Feigl, H.: The Wiener Kreis in America, The Intellectual Migration—Europe and America, 1930-1960 (edited by Fleming, D. and Bailyn, B.), Massachusetts, Harvard Univ. Press (1969). 藤本隆志訳「アメリカのウィーン学団」知識人の大移動 3. 人文科学者・芸術家 (亡命の現代史 5.): 東京, みすず書房 (1973).
- 3) Carnap, R.: Die physikalische Sprache als Universalsprache der Wissenschaft, Erkenntnis Bd. 2 (1932). 竹尾治一郎訳「科学の普遍言語としての物理言語」現代哲学基本論文集 I: 東京, 勁草書房 (1986).
- 4) Popper, K. R.: Logik der Forschung, Tubingen (1934). 大内義一・森 博訳: 科学的発見の論理, 東京, 恒星社恒生閣 (1971-72).
- 5) Kuhn, S. T.: The Structure of Scientific Revolutions, Chicago, The Univ. of Chicago Press (1962). 中山 茂訳: 科学革命の構造, 東京, みすず書房 (1971).
- 6) Feyerabend, P. K.: Against Method—Outline of an Anarchistic Theory of Knowledge, London, N. L. B. (1975). 村上陽一郎・渡辺 博訳: 方法への挑戦, 東京, 新曜社 (1981).
- 7) op. cit. 引用は邦訳 11頁。
- 8) Hanson, N. R.: Patterns of Discovery, Cambridge (1965). 村上陽一郎訳: 科学理論はいかにして生まれるか, 東京, 講談社 (1971). (邦訳は後に『科学的発見のパターン』と改題され, 講談社学術文庫に収録 (1986)).
- 9) Quine, Willard van Orman: Word and Object, M. I. T. Press (1960). 大出 晃・富館 志訳: ことばと対象, 東京, 勁草書房 (1984).
- 10) op. cit. 引用は邦訳 42頁。
- 11) op. cit. 引用は邦訳 122頁。
- 12) op. cit. 引用は邦訳 20頁。
- 13) Davidson, D.: Inquiries into Truth and Interpretation, Oxford Univ. Press (1984). 鈴木和幸ほか訳: 真理と解釈, 東京, 勁草書房 (1991).
- 14) Tarski, A.: The Semantic Conception of Truth and the Foundations of Semantics, Philosophical and Phenomenological Research 4 (1944). 飯田 隆訳「真理の意味論的観点と意味論の基礎」現代哲学基本論文集 II, 東京, 勁草書房 (1987).

(平成4年1月28日受付)



宮沢 厚雄

昭和 51 年東京大学文学部倫理学科卒業。富士通(株)等を経て、図書館情報大学図書館情報学部入学、平成 2 年卒業。現在、図書館情報大学大学院修士課程(図書館情報学専攻)在学中。



石川 徹也(正会員)

昭和 46 年慶應義塾大学大学院修士課程(図書館情報学専攻)修了。富士写真フィルム(株)足柄研究所入社。図書館短期大学を経て現在、図書館情報大学図書館情報学部教授。情報管理システム機能の高度化の研究に従事。人工知能学会、オフィスオートメーション学会、日本経営工学会等各会員。

